同化と異化のはざまで

——佐多稲子「髪の歎き」における植民地的主体の形成について——

鳥木圭太

はじめに

佐多（当時は窪川）稲子は、一九四二年一〇月三一日から、翌年四月五日にかけて、陸軍報道部の斡旋にもとづく、いわゆる南方徴用作家としてシンガポール、スマトラを訪問している。この間の経緯については、北川秋雄「佐多稲子——南方派遣と『若き妻たち』のこと」[1]に詳しい。これによると、同行した黒田俊秀『軍政』（学風書院　一九五二年）に現地の様子について詳細な記述があり、シンガポール到着後に佐多は毎日新聞の馬場秀夫によって寄宿舎を斡旋されている。

佐多のスマトラ旅程について北川は次のように推定している。

シンガポールから、マレー半島の西側を一巡りして、一九四二年（昭一七）の十二月十九日までにはシンガポールにもどり、そこでスマトラに渡る船を数日間待っていたということになる。（中略）

どのような経路でスマトラ各地を巡ったか、資料が不足していて跡付けられない。長期滞在したメダンを基地にして、各地を折々に訪れたとも考えられるが、一応の経路として、バンダアチエ→タケゴン→トバ湖→シボルガ→ブキティンギ→バダン→シャンタル→メダンを想定しておく。[2]

戦時下における佐多の〈外地〉慰問に対しては、時局への迎合として戦後一貫して批判的に言及されること多かったが、この南方行きはその佐多の戦争協力の頂点とみなされている。例えば、北川秋雄は南方慰問を挟んだ佐多の小説「若き妻たち」の単行本化の過程での改変を分析し、

戦後、佐多稲子は、南方体験を扱った小説「虚偽」を書いて、佐多稲子がモデルとなっているとおもわれるヒロインの年枝の戦争協力は、面従腹背の虚偽であるとしているが、南方派遣をもとに発表した戦時下の小説や随筆を見るかぎり、にわかには信ずることはできない。むしろ、佐多稲子自身が「聖戦」完遂を至上目的とする戦時共同体に埋没するのみならず、国民を「聖戦」に積極的に動員する御用作家として、機能していることが明らかになってくるのである。[3]

と述べている。また、最近では長谷川啓が「その後エスカレートしていく戦争の中で戦争協力的な言動（生き延びるための過剰防衛も含めて）を余儀なくされたにしろ内なる反戦の意思は密かに続行し、本質的には変わらなかったと思われる」[4]と佐多の反戦意識について述べている。

しかし本論では、佐多がいかに時局に迎合したか、あるいはいかにそれに抵抗したかについてはとりあげるべきテーマとしては設定しない。

戦時中、作家に与えられた表現の自由がさほど大きくなかったことは周知の事実であるし、作家の真意はどうであれ、〈転向〉した作家には常にその転向証明の提出が要請され続ける以上、書かれたものは多かれ少なかれ時局に埋没せざるを得ないからだ。また、一身に家族の生活を背負った女性作家の表現を、経済的・社会的に異なった立場におかれていた他の作家の表現と併置して、どちらがより時局に迎合・抵抗していたかという単純な比較も厳に慎まねばならないだろう。

軍の要請で〈外地〉に赴けば、軍の要請する範囲でしか表現が許されないということは、佐多自身が百も承知だったはずだ。にもかかわらず、作家はなぜ〈外地〉に赴き、そこで何を見、何を表現し（てしまっ）たのか。本論では、佐多のスマトラ滞在での体験を題材に書かれた小説「髪の歎き」を手がかりに、そこに表現された植民地的主体の形成について考察を試みる。

1.「混血」の物語

「髪の歎き」は『文芸読物』一九四三年八月号に掲載された。同年五月にシンガポール・スマトラから帰国した佐多は、その記憶の鮮明なうちに当地での体験を作品化した。

この作品は、日本による軍政一周年を間近に控えたスマトラのメダン市が舞台となっている。主人公のベエは家族とともにメダン市に暮らしている。ベエの父親は英国系オランダ人、母親は「佛国系にマレー人の血がまじつて」いるため、彼らはオランダの統治期には、「和蘭人に準じた生活」が許されていた。しかし、日本との戦争によって父親は行方不明となり、残された一家は一時日本軍の俘虜となり家財も没収されるも、母親側の血統（仏・マレー）を根拠に釈放され（フランスは一九四〇年六月にドイツに降伏しているため、敵性国ではなかった）、現在は知人の家を借りて暮らしている。ベエは日本の新聞社のメダン支局に事務員としてつとめていたが、そこには彼女の敬愛する日本人の支局長・吉川の他にメナンカバウ人や中国人、マレー人、ジャワ人など、さまざまな人種・民族がともに働いている。ベエは日本人である吉川以外の新聞社の人間に反発し、彼らを見下している。あるときメナンカバウ人のタリプにお茶くみを命じられた屈辱を吉川に訴えたところ、吉川から、男性で学歴のあるタリプは女性事務員のベエよりも上だと逆に諭されてしまう。ベエは自分が白人の混血児であることで疎外されていると思い込み、自分の髪の色が黒くないことを嘆く。ある日、吉川とのやりとりの中で、日本女性がピアノやバレエを嗜むことを聞いたベエは、西洋人であることをどこかで特権的に考えていた自分の傲慢さに気づき、日本女性の慎ましさを身に付けようとする。それからしばらくして、ベエは吉川からスマトラ新生一周年記念行事に、ミス・大東亜の一人として選ばれたことを知らされ、喜びに胸を弾ませる。

植民地を舞台にした文学作品の多くがそうであるように、「髪の歎き」にも、オランダ人、日本人、メナンカバウ人、中国人（華僑）、ジャワ人、インド人、等々、多様な民族・人種が登場する。そしてベエのような「混血」児も植民地空間を構成する重要なファクターとして設定されている。それは人間の身体を貫く血統だけでなく、文化や生活様式、あるいはアイデンティティや共同体への帰属意識も含めた意識の混血性のメタファーともなっている。物語の舞台であるスマトラをはじめとした「南方」は、「欧米宗主国、日本、そして植民地側の多様な民族集団・政治集団（欧化エリート、ナショナリスト、社会主義者、民主運動など）が合従連衡を含めて激しい争奪戦を繰り広げる混乱した政治空間」[5]であった。まずは、植民地スマトラのそうした政治空間と経済緒関係について考察し、

エスニシティーやジェンダーといったファクターがそこにどのような社会関係を構成していたのか確認しておきたい。

2. スマトラにおける階級と資本およびエスニシティとジェンダー

インドネシアにおけるプランテーション労働運動史研究家アン・ローラ・ストーラーは、オランダ領インドネシア（蘭印）およびスマトラにおける労働力とその民族的編成について次のように述べる。

> ジャワでプランテーションの会社が拡大したのは、周辺の村から集められた労働力のおかげで、労働力の維持と更新には周辺の村の役割が決定的であった。ジャワとは異なり、スマトラ東岸では最初中国人労働者が、後にジャワ人労働者が何十万人と連れて来られた。彼らは農園のバラックに泊まり、食事をし、年季契約という身分に縛られていた。[6]

ストーラーが述べるように、スマトラのプランテーションにおける底辺労働を主に担っていたのは、中国人とジャワ人労働者であった。

ストーラーはスマトラ北東部のデリと呼ばれるプランテーション地帯における労働史を分析するなかで、オランダによる資本主義経済の導入とそれにともなう法人資本による土地収奪について「法人資本という高度に洗練された組織体と広範で強制的な労務管理の形式が集合したものであり、それによって「デリというドルを生み出す土地」が白人の植民地帝国の最も利益を上げた事業の一つとして出現した」[7]と説明している。

ストーラーによれば、一八七〇年のオランダによる「門戸開放政策」により、イギリス・北アメリカなどの多国籍資本がスマトラに流入した結果、一九三〇年代にはスマトラの人口は一五〇万人に達し、そのうち約半数が半奴隷的労働力として導入されたジャワ人クーリー（苦力）であった。また、当時スマトラ東岸には一万一千人以上のヨーロッパ人が住み、農園産業に直接あるいは間接的にかかわっていた。こうした植民地経営の多国籍化とそれにともなう住民の多国籍・多民族化は、統治機構の複数制をもたらし、複雑な人種・民族的ヒエラルキーを形成していった。

> スマトラの土地が不正なやり方で急速に奪われ、そしてジャワ人労働者が疎外されたことは、スマトラ東岸で発達した緊張した労使関係の一部でしかない。そこではまた、きわめて厳格な人種的・民族的な序列があり、スルタン制と植民者の支配を持続させるよう強制され、操作された。このことは特に行政の問題で明白だった。そこでは直接統治と間接統治の領域が細部にまで規定されていた。移住してきた農園労働者はすべて、オランダ植民地／植民者当局に直接的に従属していた。一方、現地人はマレー人の行政と法律機構によって統治されていた。[8]

そこでは、クーリーたちは労務管理の対象として認識され、女性クーリーは直接的労働力としてよりはむしろ、男性クーリーをプランテーションにつなぎ止める役割を担わされた。そして、植民地政府当局によって「移民ジャワ人労働者は忍耐と従順さという美徳を欠いている」といったような民族的ステレオタイプが植民者がクーリーを扱う際の基準として設定されていく。[9]

このスマトラにおける植民地支配の特徴は、政府ではなく植民者による実質的統治にあった。つまり植民者の要請により、ストライキや集会

の禁止といった政治的抑圧やクーリー条例の制定などの法整備がなされていたのだ。[10]

しかし、クーリーたちも決して従順な存在であったわけではなく、時にはサボタージュや、農園管理者への襲撃によって、農園資本と鋭く対立する存在でもあった。ストーラーは

こうした騒擾の周辺にある出来事というのは、暴力や言語による虐待、意図的な配置換え、解雇、それに賃金カットなどの労使間の明白な対立のことである。だからわれわれは、耐え難いものとして体験された労使関係のこうした側面を位置づけ、そうした抵抗行動を正当化することができる。このようなリストから落とされたものは、優勢な植民地的秩序のなかで、少なくともジャワ人クーリーによっては表明されえない、より一般的な不満である。[11]

と述べ、プランテーション労働者と彼らを管理する白人スタッフとの対立は、民族的・政治的なものである以前に、経済的なもの（労使間の対立）であったと指摘している。

ストーラーが指摘するように一九二九年から三〇年にかけて、ストライキや農園監督補佐への襲撃が頻発していたという事実は、スマトラの植民地支配の背景に苛烈な階級闘争が織り込まれていたということを示す。しかし、より様相が複雑なのは、そこに民族・人種・ジェンダーといった概念が重層的に絡まり合うからだ。

要約すると、補佐とクーリーの日常的な衝突は、小規模な階級闘争ではない。むしろ、こうした事件は、階級の利害が曖昧で、それが民族的、ジェンダー、それに人種の境界にそって表出されてきた様態を理解する鍵となっている。逆に言えば、この「生きられた経験」は虚偽意識には帰せられないし、虚偽意識の分析をつまらないものにする。東スマトラにおける資本主義の構造的な特徴は、明確に規定されないまま、社会的実践上いくつかの制約をはっきり示した。[12]

ストーラーがいう「生きられた経験」としての植民地の記憶を紐解く鍵は、こうした「経験」が、まさに経済的諸関係のみならず民族・人種・ジェンダーといった複数の審級レベルによって重層的に決定されていた植民地的主体意識の形成につながるということにあるだろう。だとすれば、その植民地的主体の形成に、日本による軍制支配の経験はどのような形で影を落としたのだろうか。

次に、こうしたオランダによる植民地行政機構を引き継いだ日本によるスマトラの統治について見ていきたい。

3. スマトラ軍政の民族統治構想

一九四一年一二月八日の真珠湾攻撃とマレー半島上陸作戦で対米英戦争の先端を開いた日本は、緒戦で軍事的勝利を重ね、アメリカ領フィリピン（一九四二年一月マニラ占領）、イギリス領マラヤ（二月シンガポール占領）、同ビルマ（三月ラングーン占領）、そしてオランダ領東インド（三月無条件降伏）と各地の占領を進め、五月一八日に「南方攻略作戦」の終了を宣言した。「南方軍政」とは、これらアジア・太平洋戦争で日本が軍事支配下においた――現代の地域名称に従えば――東南アジアにおける日本軍による占領統治の呼称である。[13]

日本軍政はオランダ領東インド（蘭印）においては、海軍統治の外島（スマトラ除く）、陸軍第一六軍支配のジャワ、陸軍第二五軍支配のスマトラとマラヤの三区に行政分割をおこなった。日本軍の占領政策は「実施要項」に基づいて策定されていったが、こうした行政上の区分は、それぞれの地域住民のナショナリズム運動に対する明らかに異なった政策と対応している。つまり、日本による軍政は、各行政地域の民族構成や経済状況などによってその統治形態を微妙に変えていったといえるのだ。

例えば、占領地中、最大の人口を抱えていたジャワでは第一六軍司令官・今村均中将のもとで、宥和主義的な占領方針が貫かれたのに対し、[14] 第二五軍が支配するマラヤ（現在のマレー半島）においては、馬来軍政監部総務部長渡邊渡のもと、人口の過半を占める華僑に対する苛烈な武断統治が行われた。一六年一一月に大本営政府連絡会議において決定された『南方占領地行政実施要領』に批判的であった渡邊は華僑だけでなくスルタン（土侯）に対しても強攻策を主張する一方で、将来の南方統治の中堅幹部となる日本人および現地人青少年の育成に力を注いだ。[15]

こうした第二五軍の民族統制はスマトラにもおよび、民族ごとにその対策が策定された。例えば、一九四二年四月二七日発行の第二十五軍軍政部「「スマトラ」軍政実施要領」[16]においては、

「オランダ」本国人及其他敵国人ニ対シテハ馬来ニ於ケル敵国人ノ取扱ニ同ジ／官吏及敵側機関ノ関係者ハ勿論民間人ト雖モ之ヲ一定ノ箇所ニ収容俘虜同様ノ取扱ヲ為スベシ（中略）

土民ニ対シテハ厳正ナル監視ヲ旨トシ彼等ヲシテ乗ズル間隙ナカラシムルト共ニ将来逐次帰服撫民ノ政策実施ニ移行シ得ル如ク為スベシ／或ル一派ノ勢力伸張ノ為ニ利用セラレ若シクハ彼等ノ独立運動ニ示唆ヲ与フルガ如キ一切ノ言行ヲ厳戒スベシ

（中略）

支那人ニ対シテハ馬来ニ於ケル略〃同様暫ク厳重ナル監視的態度ヲ以テ之ニ臨ムベキモ馬来在住支那人ニ対スルヨリ稍々好意的ナルベシ

として、その処遇によって民族間の序列関係を決定し、且つ各勢力の均衡を保ちながら秩序を維持することに重点が置かれた。それは各民族間の分断・宥和政策であると同時に、行政区間における分断・宥和政策でもあった。スマトラのプランテーションで働くジャワ人労働者たちは、スマトラ人ナショナリズムからは切り離され、しばしばこれと対立した。

ストーラーは、

スマトラとマラヤの利害に関わる「自然な」連帯感を論証しようとして、日本軍の宣伝機関はその親族関係を強調し、同時にスマトラとジャワの結合に水を差した。ジャワとスマトラのコミュニケーションはすでに困難であったが、日本軍当局は両者の関係がそのままであり続けるよう画策した。[17]

と述べて、渡邊軍政における民族政策がスマトラの経済機構に占める各民族の社会的地位によっても影響を受けていたことを指摘している。

ストーラーによれば、オランダ支配下のスマトラでは急成長する農園と都市住民を賄うために海外からのコメの輸入に依存していたが、三〇年代後半に農園の一部を食料作物の栽培に切り替え、自給率の向上を目指した。日本軍はこのプランテーションを直接管轄下に置き、補給基地とした。当初そこには日本人スタッフとともに、農園管理を任されていたヨーロッパ人スタッフが常駐していたが、農園経営が日本企業に移行

されるに伴い、ヨーロッパ人は日本人管理者に置き換えられていった。それまでの「契約」運営者にとってかわり、農園は日本的集団経営へと移行していくことになる。[18]

このような日本軍軍政下において、旧宗主国オランダの支配者層はどのような扱いを受けたかは「髪の歎き」作中にも描かれている。主人公ベエの一家はスマトラの現地民ではなく、蘭印に支配階級として居住していた欧州人の家族である。ベエの父親は煙草会社に勤務していたが、現在は行方不明である。ベエの一家は、敵性国人として家財を没収されたが、それにとどまらず吉川や官憲によって常に監視されている。

だが、この娘は、母親の挙動が官憲から注意されてゐるのを知つてはゐないのだらう、と。然し、ベエは母親のさういふ注意されるやうな挙動に関係してゐるのだらうか、と、吉川は日本人の目でベエの毎日を試すやうに考へた。

（「髪の歎き」四）

先に見た「「スマトラ」軍政実施要領」にあるヨーロッパ人への処遇は実際に実行され、一部の協力的な技術要員を除いて多くが俘虜として収監された。[19]『朝日新聞』一九四三年三月一日の記事には「ジャワ敵前上陸一周年」と題する記事の中で、実際のヨーロッパ人の処遇を紹介している。

オランダ人にして敵軍に動員されてゐたものは戡定と同時に俘虜として収容したが、混血児は別として純血オランダ人数万の処理は軍政の始めに当たつて甚大の問題であつた。これらオラン人及び原住民を除く外国人に対しては居住登録制を実施し敵性顕著なるものに対しては拘束を行つた。

この記事にあるようにベエの一家は「混血児」であることで収監を免れるが、生活に困窮した一家の生活を支えるために、ベエは日本の新聞社に勤務することになる。そこで彼女はただひとり白人であることから来る疎外感にさいなまれている。このベエの感じる疎外感は旧宗主国の人間に、現地の人間から向けられるまなざしを反映している。たとえば、ベエは同僚で同い年の中国人の娘アミイに対し、強い「圧迫」を感じている。

小間使ひのアミイの甲高い声は、ベエを反発させるけれど、どこかに圧迫させるものがあって余計に気に入らなかつた。父親が海南島生まれの支那人で母親がマレー人だといふこの娘は、生まれつき勝気で、くり〳〵腰を動かして、スボンになつた支那風の服の裾を蹴つて歩く。この支那系の娘だつて、米屋だつた父が商売を失つてから生活に困つて、この支局に泣きつくやうにして働かせてもらつてゐるといふのに、何だかベエを下に見る眼つきなので、ベエにはをさまらない気持ちがあつた。

（「髪の歎き」一）

このアミイに対する反発と圧迫感はなにもベエの被害妄想というわけではない。オランダ統治期にあった一九二〇年代後半にスマトラにおけるゴムとアブラヤシの生産は飛躍的に拡大し、労働者の需要が増大した。これにともない新たな労働力がスマトラに流入し、農園間を労働者が流動的に移動するようになった。これに対し、煙草農園においては同時期に煙草の値段が半額に値下がりし、生産コストの削減が労働コストの削

減に直接反映することになる。煙草農園において労働力は固定化し、削減された余剰労働者は、行き場をなくして農園周辺に居住せざるを得ない。そして、煙草農園で労働に従事していたのは、大半がオランダ統治期初期にスマトラに流入した中国人労働者であった。一九二九年に起きた農園における大規模な抵抗運動は、その多くがこうした煙草農園で労働に従事する中国人労働者によるものであった。[20]

つまり、オランダ統治期において中国人とオランダ人の関係は、雇用者／被雇用者として既に対立関係にあったが、これが日本軍政下においてそのヒエラルキーが逆転することになる。こうした植民地資本主義社会における階級対立が民族間への対立へとスライドし、それがベエに対するアミイの態度に反映されているのだ。

そして、先述したように、日本軍政はこうした民族間対立をその統治機構に巧みに組み込んで利用し、その強化を図ってきた。作中に描かれた新聞社における民族構成は、この軍政の民族政策を相似的になぞったものであり、旧宗主国民として孤立するベエは、スマトラ現地民社員たちの日本人への反感を身代わりに引き受けるスケープゴートでもあったのだ。

「髪の歎き」では、こうした民族間の対立を個々人の具体的な身振りに投影して描出していく。例えば、「甲高い声」で「くり〳〵腰を動かして、スボン（ママ）になつた支那風の服の裾を蹴つて歩く」アミイや、自分の持ち物が返還されないことを「大仰」に吉川に嘆願するベエの母親の身振り、「ロイド縁の眼鏡」をかけて「小柄な身体だが、ちょつと上へ上げた肩つきに気どりを見せ」るメナンカバウ人のタリプなど、ベエの嫌悪はことごとく相手の身振りや身体性に向けられる。このように民族間のヒエラルキーは、身振り、髪・肌・目の色や顔つきといった身体性にそのまま階級の表象として現れるのだ。

ベエは母親の大げさな身振りをも嫌悪するが、それは新たな支配者である日本人を拠り所とせねばならないベエ自身の意識を実体として見せつけられるからでもある。さらにいえば、同じく被圧迫階級でありながら日本人に積極的に従属し、地位を保障された中国人の「混血児」アミイに対する嫌悪と母親に対するそれは、表裏一体のものなのである。

こうした人々の生活様式や身体や知覚を構築する枠組みをピエール・ブルデューは「ハビトゥス」と呼んだ。ブルデューによればハビトゥスとは「構造化する構造、つまり慣習行為および慣習行動の知覚を組織する構造であると同時に、構造化された構造」でもある。[21]

ベエが他者の身体や身振りへの評価を通して自らの社会的位相を確定しようとするのは、ブルデューが指摘するように、「社会的アイデンティティは、差異の中で規定され明らかになる」[22]からである。

一方でこうした行為体は認識の客体からも見つめ返される存在でもある。

> 社会主体が社会界を実践的に知るために活用する認識構造は、身体化された社会構造である。つまり社会界の中で「理にかなった」行動をするために前提とされるこの社会界についての実践的知識は、もろもろの分類図式（中略）、すなわち、種々の階級（年齢階層、性別階層、社会階級）への客観的分割の産物であり、意識と言説の手前で機能する歴史的な知覚・評価図式を、活用するのだ。[23]

ベエが「意識と言説の手前で機能する歴史的な知覚・評価図式」を用いて評価し、分類する対象はそれ自体が「分類されていると同時にそれら自身が分類作用をもっている人間や事物」（同前三四六頁）なのである。ベエ自身もまた、タリプやアミイによって「評価」され、「分類」されて

いくのだ。

たとえばベエ自身が吉川から次のように評価される場面がある。

大柄な身体をそつと持ち歩くやうなこまやかな足どりで出てゆく。吉川は一服しようと、パイロットに火をうつして、見るともなしにベエの足どりを見た。

この頃急に、この子は、いやに娘らしくなつて来たなァ――

そんな思ひがふと湧いた。

「髪の歎き」（四）

母親やアミイの所作を嫌悪するベエは、自ら進んで、日本人のハビトゥスに参入しようと試みる。しかしそこで大きな困難に直面せざるを得ない。なぜなら、幼少期より反復し身体に刻み込まれてきたハビトゥスは、それを転覆することは基本的に不可能だからだ。

ベエがアミイから受ける圧迫やタリプから受ける仕打ちは、そうしたハビトゥスの「象徴暴力」[24]によってもたらされる「極端な緊張」[25]として、ベエの主体構築に不安定性をもたらす要因となっていくのだ。

4．大東亜共栄圏の「混血児」

軍政当局は現地人教育の一環として各種学校の整備、知識階級層の啓蒙を推進した。

多仁安代によれば、南方軍政においては当初、治安の回復・重要国防資源の急速獲得・作戦軍の自活確保が三大目標とされ、教育は政策上の重点事項には入っていなかった。しかし、四二年七月の帝国議会で「共栄圏住民教育計画の樹立」「共栄圏留学生指導計画の樹立」「共栄圏学術研究所の樹立」などが建議され、「大東亜共栄圏」樹立に向けた言語政策の重要性が意識されだしたという。そして、軍政当局によって日本語を共栄圏の共通語としてその普及が図られることとなる。[26]

こうした言語政策は南方諸地域においては、当地における人種・民族編成及び当地に対する戦略上の重要性によっておのずと多様性を帯びざるを得なくなる。特に、軍政当局が植民地化を主張したマラヤ・シンガポール・インドネシアでは言語政策の重要性の比重が高かった。

また、日本語学校とともに職業訓練学校や、教員養成所などが設立され、現地住民に対する教育政策の拡充が図られていくが、その際、「日本婦人」が現地女性の目指すべきロールモデルとなっていく。

『毎日新聞』一九四三年三月一二日の記事に「あすメダン進駐一周年米穀自給へ転換　建設の重点・教育の普及」として、現地人女性の教育について紹介している。

戦後の建設はまづ原住民青少年の教育にありとした軍政部では進駐後間もなく閉鎖されてゐた島内の各学校を開校するとともにメダン市に農業、工業の●（一字判読不能）学校を新設して青年技術者の養成に乗出す一方新しく日本語学校を五校設け、日本精神を原住民に理解させ、また日本語の普及に努めてゐる、卒業生はすでに千名に達し官公吏、小学校教師、警察官として建設戦の第一線に立ち原住民の指導に当つてゐる。

去る二月廿日メダン青年錬成所が開設されたが、三ヶ月の訓練が終了すると彼らもまた官公吏として原住民の指導に当ることになつてゐる、このほかに男女小学校教員の再訓練所や修練農場などの設置を計画されてゐる、東海岸州における女子の日本研究熱は非常なものでメダンをはじめインテリ女性よりなる婦人日本研究会十余り設

置されてゐる、日本婦道や子女の家庭教育など日本の美風を学ばんとするものである

しかし、こうした教育政策は都市部富裕層の子弟に限定され、そこには軍政監部による巧妙な階級分断が行われていた。そしてこれは、スマトラにおいては民族分断としても機能していく。

例えば、日本軍政下における各民族の序列は細かく設定され、スマトラにおいては、「主人民族」として「「ミナンカバウ」族」、「南「スマトラ」人」、「「アチエ」族」、「「マライ」人」が挙げられ、「友人民族」として、「其ノ他原住民竝支那人印度人等ニシテ日本国籍ヲ取得セルモノ」、さらに「寄寓民族」として「支那人」、「印度人」、「欧米人其他」が挙げられるのである。[27]

こうした教育政策が短い占領期間においてどれだけ影響力をもったか、また実際にどのように実施され得たのかなど疑問点も残るが、少なくとも小説「髪の歎き」はこうした現地民女性を啓蒙する軍政当局の思惑を小説というメディアにおいて表象した作品となっている。特に「混血児」という身体性は、宗主国が想定する植民地的秩序から逸脱しこれを撹乱する存在であると同時に、上手く利用できれば異民族統合のイコンとなり得る存在である。だとすれば、佐多が主人公ベエを現地民の血を引く白人の「混血児」として設定せねばならなかったのは、軍政当局による皇民化政策の要請に応えた結果であるという見方もできるだろう。

「髪の歎き」作中において、ベエはどのように皇民化されていくのであろうか。

この小説は、現地住民に「大東亜共栄圏」に参入する資格を説いた一種の教養小説ともなっている。ある日、吉川との会話の中で「日本のヤング・レディ」について尋ねたベエは、

「ヤング・レディはね。よき妻、よき母になるために修養をしてゐる。イケバナとかオチヤといふ作法があつて、それはしとやかなものであり、日本婦道の哲学をも体得させるものだ。然しそれだけぢやない。ピアノも弾くし、バレエををどる令嬢もあるし、そしてみんな働くのだ。」

（「髪の歎き」四）

という吉川の説明を聞き、「吉川たちは何でも知つてゐるのだ、自分たちのどこにも、珍しさや、観賞するものを感じてゐはしなかつたのだ」と気づくのだ。それまではこの新しい「秩序」を頭では理解しつつも内面化できずにいたベエは、ここで初めて、自らの身体が記号として持つ意味（作品タイトルにもなっているように、髪の色が価値観の転倒を示す記号になっている）を転倒させ、日本人を自らの上位に置くことになる。つまり、この「バレエ」のエピソードで、ベエの〈転向〉は完成するのだ。

こうした植民地住民の宗主国への同化の姿勢を、ホミ・k・バーバは「擬態（mimicry）」と呼び、「植民地的擬態とは、ほとんど同一だが完全には同一ではない差異の主体としての、矯正ずみで認識可能な〈他者〉に対する欲望[28]」と定義した。バーバによれば「擬態」は、「植民地的言説の権威に対して」「深刻な撹乱効果を持つ[29]」という。すなわち、「擬態」は植民者の主体の仮想性を明るみに出し、その確定性に亀裂を穿つのである。

「擬態」に植民地主体の「抵抗」を読み取るバーバの主張に対しては、例えば竹村和子が国境の外部に形成される他者性の観点から、被植民者の擬態（竹村は「模倣」と表記）によって撹乱された主体（例えば国境や言

語を横断する雑種性）の帝国主体による再占有の問題を指摘している。[30] 竹村はホミ・バーバの「擬態（模倣）」の概念を批判的に論じる中で、擬態の両義性（覇権的な（ネオ）コロニアル権力を撹乱し空洞化して、権力布置を流動化させていく解放的側面と、コロニアル権力を拡大し強固にして抵抗の潜在力を剥落させる否定的な側面）の否定的側面からまぬがれる可能性を示唆するのは、「帝国主体が再占有することを恐れる他者性」であると指摘し、「帝国主体が「外なる他者」になりたい、なることによって「外なる他者」を再占有したいと願うことからもっとも遠い他者性、それは植民地の女という他者性ではないだろうか」[31]と述べる。

「髪の歎き」でいえば、竹村が指摘する帝国的な主体、すなわち宗主国の男性主体である吉村が再占有することを恐れるのは、ベエの母親によって象徴される植民地の女の身体である。

吉川は、没収された家財の早期返還に便宜を図ることを依頼するために新聞社を訪れたロゼエ（ベエの母親）が、自分の前では「へり下るやうな口ぶりで」「大仰な歎願」をしていたのに、「帰り支度に事務室の方へ行つたロゼエが、もうそこでけろつとしたやうに声の調子さえ変へて、しやん〳〵とベエに何か言つてゐるのを聞」いて「相当な女だ」という感想を抱く（「髪の歎き」二）。また、後日自分の妻の素直な態度と、ロゼエの態度を比較し、「ベエの母親の先日の頼みや、あゝいふ女の利己の要求に強いのが対照的に考へられた。／あゝいふ女はかなはんな」（「髪の歎き」三）と嫌悪の念を抱くのだ。また、「日本のレディ、どんな風に生活してゐます？」というベエの問いに対し、「日本のレディかい。日本のレディはね、君のママのやうに、あんな大げさな身振りはしないんだ。もつと優しくてそれでしつかりしてゐる」（「髪の歎き」四）と、ロゼエは日本女性と対置される存在として吉川に引き合いに出される。

吉川の言葉に「恥しさ」を覚えるベエは、すぐに大げさな感情の表現を殺し、「女の方からお早うございます、と挨拶をするね」（同前）という吉川の助言を実行に移していくのだ。

吉川はベエに対しハビトゥスによる承認を与えることで、ベエを母親とは異なる存在として馴致し、まさにベエが擬態によって獲得しようとする身体性を再占有しようとする。

ここで重要なのは、吉川の主体形成もまた、ベエの身体を再占有するという擬態によってなされるということだ。竹村によるバーバの「擬態」概念批判を受けて、新城郁夫は豊川善一「サーチライト」（『琉大文学』一九五六年三月）の分析を通じ、擬態の擬態、すなわち占領者が植民地住民による擬態を欲望することで「植民者の身体に逆流」し、「植民者の主体が不可避的に自らの擬態性に傷つけられ解体に晒される」[32]事態が植民者の主体に引き起こす政治的危機を指摘している。両者の指摘は、擬態によって引き起こされる「異種混淆性（hybridity）」が被植民者のみならず、植民者の文化にも及ぶ相互的なものであるという認識に基づいている。

> 擬態は、被植民者にのみ同定される「攪乱」的戦略などではない。植民者そのものがはじめから擬態的存在なのであり、本国との埋めがたい距離とその隔たり故の激烈な同一化への欲望のなかで、擬態に駆られていくのが、帝国主体であり植民者であると言えるのではないか。[33]

本国とのその埋めようもない差異は、吉川の主体形成にかすかな動揺を喚起せざるを得ない。新たなハビトゥスに参入しようとするベエの擬態は、この宗主国の男性主体を脅かす契機となりうるのだ。ではこの男性主体の動揺は「髪の歎き」ではどのように描かれているのだろうか。

作中、タリプからお茶くみを命じられたベエが、その不満を吉川にぶつけるという場面が描かれる。吉川はベエの不満に、次のように応答する。

「タリプは男であるから、事務員同士の中ではタリプの方が上である。だから、電話を聞け、と命じることはあるかも知れない。しかし、この支局に於いては、すべての権利は、この支局の主である自分にある」（中略）

「それでは、タリプは私よりも上なのか」（中略）

「さうだ。タリプは昭南のハイスクールを出てゐる男の事務員であるから」

（「髪の歎き」三）

ここで吉川がもちいたロジックは、民族間に横たわるヒエラルキーをジェンダー間のヒエラルキーで隠蔽するものであった。さらにそこに階級間のヒエラルキーという覆いを掛けることでこの隠蔽は完成する。タリプの立場がベエより上なのは、学歴があり、男であるからだ、と。

しかし、この吉川の戦略は、即座にベエによって見抜かれる。

嘘だ、とベエは心のうちで叫んでゐる。タリプは原住民だから、日本人は白系の混血児よりも原住民を上に見てゐるからだ、と思つてゐる。

（「髪の歎き」三）

だから、すかさずベエは「アミイと私は？」と次の問いを投げかける。吉川の説明が真ならば、同じ女性同士ではこの論理は適用されないはずだからだ。そして、本当に社員の能力を重視するのであれば、英語がわからないアミイより、ベエの方が職位は上になるはずだからだ。

しかし吉川は、

「君たちは、ベエは事務員であり、アミイは小間使ひである。自ずからその職域が別なのだから、どちらを上にし、どちらを下にするといふ区別をつける必要はない」（中略）

「君たちは同じ年頃の女の子なのだから、友達にならなければいけない」

（同前）

と、今度は職種における平等性と同性間の平等性を持ち出し、両者のヒラルキーを無化する。

しかし実はここでベエを疎外していくのは、植民地空間に形成される、ホモソーシャル[34]な共同体なのである。吉川と彼に擬態するタリプによる連帯は、女性性を排除することでその精神的・心情的紐帯を強固なものにしていく。こうしたホモソーシャルな連帯によっても、植民地空間における民族間のヒエラルキーは隠蔽されていく。

吉川の駆使するこうしたロジックは、民族間ヒエラルキーを維持し統治政策に利用しながらも逆に民族間の平等と宥和を説くという、一見矛盾したスマトラ軍政監部の民族政策を如実に反映しているのだ。しかし、そのロジックには亀裂が顔をのぞかせる。

「アミイと私は？」というベエの問いかけは吉村を一瞬たじろがせる。

吉川はちょつとつまつた。支那人の小間使ひと、白系混血児の事務員とどちらを上とすべきか。

（同前）

ここで吉村が見せる動揺は、ベエの問いかけが植民地政策の欺瞞のベールを剥いだことを読者に提示する。「処女地」という言葉に象徴されるように、男性主体のまなざしによって構築されていく植民地空間は、それ自体がジェンダー化されたトポスとして、植民者・被植民者の双方に主体形成を迫っていく。こうした空間の中で、ベエは民族意識とジェンダー規範のはざまで、植民地空間における「象徴的暴力」を内面化していく一方で、その帝国主体の仮想性を明るみに出すのだ。つまり、ベエが擬態しようとする「日本のヤング・レディ」の姿は、吉川自身が植民地において本国のあり方を擬態していく欲望を明るみに出し、支配者と被支配者双方の植民地主義的な意識がいかに構築されるかを描き出すことで、そうした植民地言説の強度に亀裂を穿つのである。はたして吉川が言うように、総力戦下の日本においてバレエを嗜むことのできる「ヤング・レディ」がどれほどいたであろうか。

物語は帝国主体の解体あるいは支配の転覆までには筆が及ばないものの、こうした帝国主体を動揺させるかすかな予兆を提示して幕を閉じる。しかし、一方で竹村や新城が指摘するように、被支配者の擬態は、支配者の意識を撹乱すると同時に支配者の規範意識を再配備し、植民地的支配構造を強化していく危険性を孕むものでもある。

物語のラストで、ベエは大東亜共栄圏の「共栄」を文字通りに体現する記号となる。ベエは吉村から、スマトラ戡定一周年を記念するセレモニーに「ミス・大東亜」として参加することを要請され、胸を弾ませる。

> ミス・大東亜。インドネシヤと印度人と華僑と、それに日本から来てゐる某会社のタイピストの娘さんが三人加はる。そして、うれしいことに混血児さへ加はることになつてゐるのだ。ベエはその一人。
>
> （「髪の歎き」五）

ここで描かれるように、スマトラで開催された「スマトラ戡定一周年記念」のセレモニーには、実際に「混血児」の身体が動員されていた。

> 「スマトラ」戡定一周年記念ヲ期シ三月十二日ヨリ二十七日ノ間「スマトラ」全島ニ於テ大々的ニ実施シ宣伝ポスター、伝単ヲ散布シ巡回宣伝隊移動宣伝隊ヲ全島ニ派遣シ対民衆宣伝並ニ国威宣揚ニ務ム民衆ノ協力亦絶大ニシテ全島各地共ニ現地住民ノ熱狂的ナル帝国ヘノ信頼ハ蘭領時代ニハカツテ見ザル現象ナリト[35]

この式典は「内地」においても次のように報道された。

【メダン十三日初同盟】皇軍北部スマトラ・メダン進駐一周年記念日を迎へ、十三日午前十時メダン政調前の記念式典場には軍政部員を初め邦人原住民各界代表、一般参列者約五万が参集、厳粛な式典が挙行された、一方インドネシヤ、華僑、インド独立聯盟などの各民族代表が〇〇部隊長を訪問感謝の挨拶をなしまた各民族代表婦人は傷病将兵の感謝慰問を行つた[36]

「太平洋戦争　蘭印　日本軍進駐１周年記念祭」
1943年３月撮影（毎日新聞社提供）

その異種混淆性を旗印に掲げる大東亜共栄圏のイデオロギーは、その理念を体現する「混血児」の身体を歴史的モニュメントとしてメディアの中に再記述し、消費していったのだ。

終わりに

「髪の歎き」は、それまで日本人が抱いていた〈西洋〉へのコンプレックス（オクシデンタリズム）を、植民地空間におけるベエという「混血児」の身体を通じて転倒させるというきわめて暴力的な試みである。それは同時にベエという植民地的主体と作者である佐多自身が巻き込まれていく支配の構造とをアナロジカルに描き出す試みでもあった。

本作について批判的に言及するのであれば、宗主国の女性主体（佐多）が、植民地の女の内面を語ることで、宗主国の男性主体（それは帝国主義の欲望を体現したものである）に対して疑義を突きつけるという、作品の構造自体が抱え込む屈折をどう評価すべきかということになるだろう。それは佐多自身が数多くの外地体験の中で経験せざるを得なかった意識の分裂をどう評価するかということにもつながる問題であり、ここでは言及する紙幅を持たない。

しかし、ここで佐多が描いてしまったものは、民族とジェンダー、そして階級によって人間が重層的に絡め取られる植民地空間の暴力性そのものなのだということだけはいえるだろう。また、この作品が日本の読者にむけて発表されたことを考える時に、吉川の姿によって表象される植民地の男性主体の構築のあり方にも極めて皮肉に満ちた視線が投げかけられていることが看取できるだろう。

佐多のこの暴力的な試みは、自身が依拠するプロレタリア文学運動の崩壊と家庭の危機を経てきた女性作家の冷めた視点を介在させることで、植民地における日本人男性の主体形成の過程とその欲望をも逆説的に浮き彫りにしていくことになるのだ。

以上のことからわかるのは、この小説が作者の意図にかかわらず、植民地主義が内包する差別の構造自体を告発する構成となっているということである。それまでの旧宗主国による秩序を、「大東亜共栄圏」の秩序に塗り替えていくことが「東亜新秩序」の内実であったならば、この小説はむしろ何よりもまず、この「東亜新秩序」の持つ欺瞞を描き出した小説なのだ。

また同時に階級意識がジェンダー規範を媒介にして民族意識を転倒させ塗り替えていくという構造は、それまでのプロレタリア文学が内包していた植民地主義的な意識を露骨に可視化したものでもある。それは植民地におけるヘゲモニー闘争が、如何にして（作者も含めた）植民地的主体に影響を及ぼしていくかという問題でもある。

だとすれば、佐多自身が体験しつつある〈転向〉に、それは大きな影を落としていたのではないだろうか。

付記　本論における「髪の歎き」の引用は初出によった。また、引用資料の旧字は新字に改めた。

注

① 神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家　戦争と文学』世界思想社　一九九六年
② 『佐多稲子研究』（双文社出版　一九九三年、二六七―二六八頁）
③ 同前　二八〇頁
④ 「佐多稲子のアジアへのまなざし――反復される戦争の記憶と反戦の言説」長谷川啓・岡野幸江編『戦争の記憶と女たちの反戦表現』ゆまに書房　二〇一五年、六二頁

⑤ 中野聡「植民地と南方軍政――帝国・日本の解体と東南アジア」（倉沢愛子ほか編『岩波講座　アジア・太平洋戦争7　支配と暴力』岩波書店　二〇〇六年）

⑥ 中島成久訳『プランテーションの社会史　デリ／1870-1979』法政大学出版局、二〇〇七年　二頁

⑦ 前出『プランテーションの社会史』二〇頁

⑧ 同前　三四頁

⑨ 同前　五九―六九頁

⑩ 宮本謙介『インドネシア経済史研究―植民地社会の成立と構造―』（ミネルヴァ書房　一九九三年、二六六―二七一頁）

⑪ 前出『プランテーションの社会史』一一八頁

⑫ 同前　一一九―一二〇頁

⑬ 前出　中野聡「植民地統治と南方軍政――帝国・日本の解体と東南アジア」

⑭ 同前

⑮ 明石陽至編・解説『渡邊少将軍政（マラヤ・シンガポール）関係史・資料』第三巻　龍渓書舎　一九九八年、八―一〇頁

⑯ 同前　二二二―二二四頁（傍線引用者）

⑰ 前出『プランテーションの社会史』一四一頁

⑱ 同前　一三四―六頁

⑲『富集団政命第二八号別冊　馬来及「スマトラ」統治ニ関スル指示』（前出『渡邊少将軍政（マラヤ・シンガポール）関係史・資料』第四巻　二〇一頁）

⑳ 前出『プランテーションの社会史』一一一―一一二頁

㉑ 石井洋二郎訳『ディスタンクシオンⅠ』藤原書店　一九九〇年、二六三頁。原著は一九七九年

㉒ 同前

㉓ 石井洋二郎訳『ディスタンクシオンⅡ』藤原書店　一九九〇年、三四〇頁。

㉔ P・ブルデュー、ロイック・J・D・ヴァカン『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待　ブルデュー、社会学を語る』水島和則訳、藤原書店　二〇〇七年、二一六頁

㉕ 同前　一〇八頁

㉖ 多仁安代『大東亜共栄圏と日本語』勁早書房　二〇〇〇年、一二五―一二六頁

㉗ 前出『南方関係資料⑳　渡邊渡少佐軍政関係史・資料』第三巻　三五四―三五五頁

㉘ ホミ・K・バーバ『文化の場所』（本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美訳　法政大学出版局　二〇〇五年、一四八頁、傍点は原文。原著は一九九四年）

㉙ 同前　一四九頁

㉚ 竹村和子『フェミニズム』（岩波書店　二〇〇〇年、一〇一頁）

㉛ 同前　一〇二頁

㉜ 新城郁夫『沖縄を聞く』（みすず書房　二〇一〇年、八一頁）

㉝ 同前　八四頁

㉞ イヴ・K・セジウィック『男同士の絆　イギリス文学とホモソーシャルな欲望』（上原早苗・亀澤美由紀訳　名古屋大学出版会　二〇〇一年。原著は一九八五年）

㉟ 富集団司令部「戦時月報（軍政関係）」一九四三年三月（『南方軍政関係資料⑱ 極秘　戦時月報・軍政月報　第四巻』龍渓書房　二〇〇〇年、一四頁）

㊱「メダン進駐一周年記念式」（『毎日新聞』一九四三年三月一四日）

（本学文学部助教）